

道元の思想とはどのような哲学か

エンリコ・フォンガロ

ヨーロッパにおいても近年道元は広く知られるようになってきたが、道元の思想は、仏教思想の範疇で考えるべきか、それとも哲学として扱うべきであろうか。和辻哲郎の著書『沙門道元』（1926年）以来提起されてきたこの問題は、現在イタリアをはじめとしたヨーロッパにおいても議論が行われている。道元を哲学者として考えるのであれば、それはどのような哲学であるのかを考えてみるのが本発表の趣旨である。キム氏（H.J. Kim, *Eihei Dōgen, Mystical realist*, Wisdom publications, 2004）らが主張するように、大乘仏教の思想は、普遍的な関係主義に基づくものであり、「法界」における「法」（ダルマ）が実体的なものではなく、関係の中にしか存在しないとされている。そうだとすると、ロビアーノ氏の発表で述べられているように、大乘仏教の中心である「関係」をどのように考えたら良いかという問題が生じる。

華嚴宗の代表的な思想家、法蔵（643-712年）では、このような大乘仏教的な関係主義的考え方を時間に応用した。『華嚴金師子章』7巻の第8においては、「此師子是有為之法、念念生滅。刹那之間、分為三際、謂過去、現在、未來。此三際各有過、現、未來、總有三三之位、以立九世、即束為一段法門。雖則九世、各各有隔、相由成立、融通無礙、同為一念、故名十世隔法異成門。」とあり、時間も関係に基づいて考えることになるとしている。

エーバーフェルト氏が彼の著書（R. Eleberfeld, *Phänomenologie der Zeit im Buddhismus*, frommann-holzboog 2004）で指摘しているように、道元の時間の考えは法蔵から影響を受けており、『正法眼蔵』の「有時」と「伝衣」の章の中でそれが見られる。法蔵では、時間は時間点の間の

抽象的關係から成り立っているとしているが、道元の場合には、時間は日常的経験に基づいた過程であるという考えが強調されている。特に、有時という概念において、はっきりとそれが示されている。道元は、「いわゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。」とする。つまり、道元思想において、関係というものは法の有あるいは法の時に関してだけでなく、その「有時」に関して使用されている。

さて、大乘仏教において、道元思想が関係主義の極限的な発展であると解釈できるのであれば、ドゥルーズが彼の最初の著作においてヒュームに対して問うてきた疑問を応用することができると考えられる（『経験論と主体性 ヒュームにおける人間的自然についての試論』、河出書房新社2000）。つまり、関係とは「内在的」なものか「外在的」なものかということである。もしも関係がその項に対して「外在的」であれば、その哲学は経験主義になり、そして経験主義では2つの考え方が可能である。1つは「原子論」、もう1つは「連想主義」である。このように考えると、道元思想を「哲学」として解釈してみるならば、経験主義かつ連想主義ということになると言えるであろう。ただ、もしも道元思想が「経験主義的連想主義」と言えるのであれば、次の問題は道元の「外在的な関係」とは何かということである。ドゥルーズは、『シネマ1』で以下のように述べている。

「全体というものを定義しなければならないとすれば、わたしたちは、全体を<関係>によって定義するだろう。なぜなら、関係は事物の固有性ではないからである。また関係はその関係の諸項に対して外在的であるからだ。したがって関係は、開いているものから切り離しえず、精神的あるいは心的な或る存在を提示している。関係は、事物に属するものではない。関係は、諸事物の閉じられた総体と混同されないかぎりにおいて、全体に属するものである。ひとつの総体に属する諸事物は、空間内の運動によって、それぞれの位置を変える。しかし、全体はもろもろの関係によって、性質変換をし、質を変える。持続そのものについて、

つまり時間について、わたしたちは、時間とは諸関係の全体であるということができる。」(ドゥルーズ、『シネマ 1・運動イメージ』、法政大学出版社、2008年、19-20頁)

まとめると、道元思想は、哲学として解釈すれば、経験主義的な特徴を持ち、そしてその外在的關係は「時間」として考えられる。これをより詳しく吟味するには、道元とドゥルーズ思想の比較が有意義な示唆を与えてくれることであろう。

(エンリコ・フォンガロ・東北大学)